

ヘラの長く柔らかい髪

杉田 敦（美術評論家・女子美術大学芸術学部教授） 巷房2、東京 2004

古賀亜希子の作品は、室内や室外の何気ないシーンを撮影した作品だ。階段の片隅に置かれた置物や、壁に掛けられたかわいらしい飾り付け、テーブルの上に並べられた細々としたアクセサリー、鮮やかな緑色の造花、デコラティブな額縁に取められたお気に入りの写真。それらは全て、そこに暮らす幸せな家族のかけがえのない品々だ。古賀はそれらのシーンを、幸せにまどろむ女性たちとの会話を通して探りあてていく。むせかえるような幸福の光景。けれどもやがて、そこに何か軋むような音が聞こえてくる。音はしだいに大きくなり、ついには耳をおおいたくなる。いつしか、甘いとろけるような光景は、醜酔して重たい毒気を放ち始める。

古賀の作品は、エイヤ＝リサ・アハティラやエマニュエル・アンティレの作品を連想させる。アハティラのそれが神経症の女性たちとの会話を、アンティレのそれが自身の夢から構築されているのに対して、古賀のそれは知人の女性との静かな会話から構築されている。アハティラやアンティレの映像作品に比べれば、古賀の作品はつつましくオーソドックスなものだ。けれどもだからこそそれは、誰もが逃れがたく縛られている日常生活の奥底にあるものを知らせることにもなる。もちろん、それは古賀が言葉を交わした女性だけに言えることではない。作家である古賀自身はもちろん、古賀の作品にたたくむわたしたち誰もが秘めているものなのだ。

タイトルのヘラは、ギリシャ神話の結婚を司る女神の名前である。彼女は結婚と出産の守護神だが、嫉妬のあまり幼い庶子ヘラクレスに2匹の蛇を差し向ける残忍さも秘めている。幸福の裏に貼り付いた狂気。うねるようなヘラの柔らかい髪は、やがて蛇のようにも見えてくる。

